

聖書：創世記 19：23～38

説教題：洞穴の中に

日時：2023年9月24日（朝拝）

いよいよ今日の箇所です。ソドムとゴモラへのさばきが行われます。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、彼らの罪はきわめて重い」という主の言葉がすでに18章20節に記されていました。そこで二人の御使いが旅人の姿を取ってこの町の最終調査のために入って行きました。そんな彼らをソドムの町の人々はみんなで同性愛の対象にしようとしていました。これをもってこの町のさばきは決定となったようです。御使いはロトに、身内の人たちとともにこの町から出るように命じました。しかしロトはこの町への未練があったためか、なかなかすぐには行動しませんでした。そんな彼と彼の妻と二人の娘を御使いは力づくで外へ連れ出して、山へ逃げなさいと指示しましたが、ロトは近くの町ツォアルに逃げさせてくださいと頼みました。御使いは譲歩してその願いを聞き入れ、ロトがその町に着くまでさばきを待つと約束しました。そうして太陽が地の上に昇り、ロトがツォアルに着いたという場面から今日の箇所は始まります。

その時でした。ついにソドムとゴモラに対する厳しいさばきが天から下りました。まず私たちはこのさばきが徹底的なものであったことをここに見ます。天から降ったのは硫黄と火でした。しばしばこれはどんな現象だったのか、特に自然現象から色々説明しようとする人たちがいます。もちろん神が自然現象を用いてさばきを行うことも可能ですが、それを単なる自然現象としてだけ説明してしまっただけではなりません。これは天から降って来たものであり、主のもとから下ったものと言われています。それは主の御手によるさばきでした。それはそこにあつたものをことごとく滅ぼしました。25節に主は「これらの町々と低地全体」、「その町々の全住民」、さらには「その地の植物を」滅ぼされたとあります。28節にはこの低地の全地方から、まるでかまどの煙のように煙が立ち上っていたとあります。いかにこのさばきがあらゆるものを焼き尽くす徹底的なものだったかが分かります。また、ここに見るさばきのもう一つの特徴は、それは突如として起こったということです。今日の人々はさばきなどあり得るだろうかと問います。そんな兆候はどこにもない。世界はこれまで安定して続いて来たし、これからもそうである。少なくとも私が生きている間は大丈夫だろうと。しかしそれは当時のソドムの人々も同じだったでしょう。このようなさばきが下る前兆はありませんでした。ある日突然さばきは彼らの上に臨みました。もちろん神はそれまで

忍耐に忍耐を重ねてさばきを延期して来られたのですが、それが行われる時、神はさばきを小出しにせず、一気に行われるのです。ですから私たちもさばきが近づいた兆候が見られたら準備を始めようなどと考えていたら間に合いません。ある人は死の床に臥したらキリスト教を信じようと思っているかもしれませんが、そうはうまく行きません。最後の瞬間は突如やって来るのです。神がくださっている「今」という憐れみの時を無駄にやり過ごすなら、その日は一気にその人に臨むのです。

またさばかれたのはソドムとゴモラの町々だけではありませんでした。ロトの妻もそうだったというのが 26 節です。御使いは 17 節で「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない」と命じていました。なのに彼女はソドムとゴモラにさばきが下った時、振り返ってしまいました。なぜでしょうか。それは彼女の心が後ろに置いて来たものの方にあつたからです。さばきを受けるべきものに対する執着心があり、それらのものに彼女の心が深く結び付いていたからです。そのため、彼女はせっかく町の外に出て直接的なさばきは免れたのに塩の柱になってしまいました。イエス様はルカの福音書 17 章で、やがてご自身が来られる再臨の日を、このロトの日にとえています。「その日、屋上にいる人は、家に家財があつても、それを持ち出すために下に降りてはいけません。同じように、畑にいる人も戻ってはいけません。」と言われ、32 節でこう言います。「ロトの妻のことを思い出しなさい。」問われていることは私たちの本当の関心はどこにあるのかということです。私たちの心はどこにあるのか。ソドムに心があつたロトの妻はソドムと一緒に滅ぶこととなりました。私たちの心はロトの妻のように、やがては過ぎ去るこの世のものに結び付けられているのでしょうか。それとも主がくださる永遠に続くものを見つめ、それを待ち望んで歩む者なのでしょうか。

翌朝早く、アブラハムはかつて主と語り合ったあの場所へ行きました。ソドムとゴモラの町はどうなったか心配だったからでしょう。するとその低地の地方からは、かまどの煙のように煙が立ち上っていました。つまりさばきは実行されたということでした。徹底的なさばきが行われたということでした。正しい者が 10 人もいなかったこととなります。アブラハムは主のなさることは正しいと受け止めつつ、この光景に何と大きな衝撃を受けたことでしょうか。しかし慰めは 29 節にロトが救われたことが書かれていることです。アブラハムはこの時、まだそのことは知らなかったと思われます。ロトはどうなったかと案じていたことでしょうか。しかしここに神はアブラハ

ムを覚えておられたので、ロトを滅びの中から逃れるようにされたとあります。時に私たちの祈りは全部無駄だったように思われるかもしれませんが。効果はなかったと思われるかもしれませんが。しかしそうではないのです。主は私たちの祈りに聞いてくださり、私たちが誰かのために執り成しの祈りをするなら、その私たちのゆえに、私たちが祈った人に大きな憐れみを施してくださる。ですから私たちが天国に行った時、私たちはそこに私たちが地上で祈った人がいるのを見て驚き喜ぶかもしれません。その人が救われていたとはその日まで知らなかった。しかし主は私の祈りを聞いてくださり、それを御心に留めて、そのように導いてくださったと知るなら、それは何と大きな喜びであり、また慰めであるのでしょうか。もちろん一人一人が信仰を持つ必要はありますが、そのために主は私たちの祈りを聞いてくださるのです。あるいは反対に私たちが天国にいるのを見て、私たちのために陰で一生懸命祈ってくださった方が天国で大きな喜びに包まれるということが起こるかもしれません。その時に私たちは誰かに祈られて自分はこの恵みの中にあること、その祈りに支えられて今あるところに立たせていただいているのだと改めて知ることになるかもしれません。そのことを覚えて、私たちも執り成しの祈りに励む者とされたいと思うのです。

さて 30 節以降はロトのその後についてです。ロトはツォアルから上って二人の娘と一緒に山の上に住んだとあります。彼は先に御使いから、山へ逃げなさいと言われていたのに、それを拒否してツォアルの町に住んだはずです。こうして山に移動するのなら最初からそうすれば良かったのではないのでしょうか。それにしてもなぜ彼は今になって山の方へ移動したのでしょうか。30 節に「ツォアルに住むのを恐れたからである」とあります。彼はこの町に住んでいる間に、ソドムと同じような罪が満ちていることを見て、この町もいつかさばかれると思ったのでしょうか。御使いはこの町は滅ぼさないと断言していたのですから、その約束に安んじてこの町で生活すれば良いのに、そうしない、平安のないロトの姿がここにいます。そして彼らは洞穴の中に住みました。洞穴とはどういう場所でしょう。洞穴はこの後、聖書ではアブラハムの妻サラが葬られる場所として出て来ます。つまり墓場です。またサムエル記などでは逃亡の場所として出て来ます。つまり祝福された豊かな生活場所ではありません。実に目に見えるところに従い、この世の華やかさを求めて歩んだロトが最後に行き着いた場所はこの洞穴でした。彼は 13 章でアブラハムと別れて生活することになった時、年長者のアブラハムが先に土地を選ぶ権利を与えてくれたことに恐縮することもなく、豊かで繁栄している地域を取りました。しかし彼が選んだその町は主によってさばかれ、

焼き尽くされました。ロトはそこで築いたすべての財産も失いました。そしてついには洞穴に住むことになりました。これがロトの行き着いた場所、彼のような人生の選択をした人がたどり着いた末路、終着点であるところの箇所は示しているのではないのでしょうか。

さらに彼の娘たちがとんでもない行動に出ます。洞穴でひっそり暮らす自分たちのところに来てくれる男の人などいない。そこで彼女たちは何と父によって子をもうけようとします。ここにこの娘たちもソドムの影響を色濃く受けていたことが現れています。先にはロト自身がソドムの人々に、娘たちを差し出しますから好きなようにしてくださいととんでもない提案をしましたが、今度はその娘たちがさらに驚くようなことをしました。つまり彼女たちはソドムの町を抜け出て来たとは言え、ソドムは彼女たちについて来たのです。肉体的にはソドムの町から出ましたが、彼女たちの心にはなおソドムが住み続けていました。生まれた子はそれぞれモアブ、ベン・アミと名づけられました。モアブとは「父から」の意で、ベン・アミは「私の民の息子」という意味です。この名前を見ると彼女たちは自分たちがした行為を少しも恥じていないようです。なおここから出るモアブ人とアンモン人はこの後、イスラエルに対して敵対する人たちです。申命記 23 章 3 節には、約束の地に向かうイスラエルに対して、モーセが次のように説教した言葉が出て来ます。「アンモン人とモアブ人は主の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して主の集会に加わることはできない。」 またその後の 6 節にはこうもあります。「あなたは一生、彼らの平安も彼らの幸せも決して求めてはならない。」 これはこの時のロトとその娘たちのせいと言うよりは、後のモアブ人とアンモン人が主の民に対して敵対したからです。と同時に私たちはモアブ人の中から将来ルツが出ることも知っています。彼女はイエス様のいわば先祖となる人です。つまりこのような民族でも主を信じ、主に従う者は救われることをこのことは語っています。どんな背景を持つ人であっても、主を信じ、主により頼む人は救いを得、豊かな誉れを受けるという福音を、私たちはルツの記事を通して学ぶことができます。

以上の箇所から私たちは神のさばきは来るということをもまず思われます。この後、聖書でそのように用いられていますように、ソドムとゴモラのさばきはやがての最後のさばきの前触れとしての意味を持っています。そしてそのことを知る私たちは、神以上に世を愛してはならないことを教えられます。「ロトの妻を思い出さない」と言

われています。ヨハネの手紙第一 2 章 15 節：「あなたがたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。」 私たちは何を愛しているのでしょうか。何に第一の関心があるのでしょうか。過ぎ去るこの世にしがみついたらならないこと、むしろ過ぎ去るこの世のものには淡泊な態度でいるべきことを私たちは教えられます。いつでもそれらを手放し、捨て置くことができる関係でいるべきです。むしろいつまでも続くものこそを求め、そのために自分に与えられている貴重な時間とエネルギーと賜物を用いたいと思います。

またロトの姿からも警告を受けます。彼はさばきから救い出されましたが、ほとんどを失いました。コリント人への手紙第一 3 章 15 節には、その人が地上で建てた建物は全部焼かれて失われるが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かるという話が出て来ますが、ロトをそのような人に重ね合わせて見る人は多くいます。ロトは創世記 13 章で見たような選択をした人です。この世の繁栄に引き付けられ、それを求めて歩んだ人です。しかし彼が魅了されたソドムの町は結局失われ、彼がその町に建てた家も失われ、財産も失われ、一緒にソドムを愛した妻も失われ、最後は当初の願いとは真逆のような洞穴生活に至りました。そしてそこでも娘たちによって頭を抱えざるを得ないような恥ずべきことが起こりました。これがロトが刈り取ったもの、彼が最後に手にした報いです。この姿から学び、自らを振り返って、真に行くべき道を確認する者とさせられたいと思います。やがてこの世とともに過ぎ去るものではなく、いつまでも続くもの、御言葉が約束しているものにこそ目を留め、導かれて行くアブラハムの道こそを進む者とされて行きたいと願います。